

集合行動と合理的選択

—場所、コミュニティと個人的利益の限界—

バイロン・ミラー

(神谷浩夫・香川雄一訳)

Byron MILLER.

Collective action and rational choice: place, community
and the limits to individual self-interest
Economic Geography, 68, 1992, 22-42.

要旨 場所に根ざした政治への地理学者の関心の高まりにも関わらず、場所に根ざした社会関係が集合的な政治行動に対して及ぼす影響は、さほど理論化が進んでいない。フリーライダーの問題—なぜ合理的で利己的な個人が、自分の影響が僅少であり集合行動の便益が公共的で無償の時に、集合行動に加わるのか—を強調することによって、合理的選択理論は集合行動を正しく問題設定している。しかしながら、人間の性質を本質的に「経済人」とみなすモデルに依拠しているため、非戦略的な形態の合理性や集合的アイデンティティの形成、場所に固有の社会関係が持つ重大な影響を考慮していないという支持できない結論がしばしば導き出される。対照的にハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』は、もっと幅広い合理性の概念を呈示しており、そこでは、戦略的で手段的な合理性の形態だけでなくコミュニケーション的形態の合理性をも認識し、孤立した個人ではなく社会的相互作用に焦点を当てている。コミュニケーション的行為によって、人々は、共通理解に到達し、共同体の紐帯を形成し、集合的アイデンティティを構築する。戦略的な形態の行為調整に比べたコミュニケーション的形態の行為調整の相対的重要性は、地理的にも歴史的にも異なっており、システム全体の過程から切り離しては理解できない。(コミュニケーション的合理性に基づいた) コミュニケーション的形態の行為調整は、(戦略的で手段的な合理性に基づいた) システム形態の行為調整によって「植民地化」され、高い可動性を持つ資本によって不安定化させられると、共同体の紐帯は解体する。その結果場所の重要性は、コミュニティの基盤としては減少し、企業の立地や投資の意思決定においては増大した。けれどもこうした過程は抵抗を生み出す。場所に強く根ざしたコミュニティは、それが脅かされる場合に運動性が高まり、時空間の圧縮によって生み出される経路を通じて新たな形態の集合的アイデンティティが生まれる。

キーワード：資本の高可動性、集合行動、集合的アイデンティティ、コミュニケーション的合理性、コミュニティ、政治、ハーバーマス、生活世界の植民地化、場所、合理的選択理論、戦略的合理性

近年、経済的再編成に対する地理学者の関心は、集合行動に関することがらまで拡大してきた。Hudson and Sadler(1986)、Harvey(1987)、Cox and Mair(1988)、Leitner(1990)は、経済的再編成と地方の政治行動との関係を検討している。彼らの研究は、政治行動を作り上げる広範な社会経済は再編成過程だけでなく、場所に規定された利害の重要性も強調している。階級と領域の団結性が発達する際に果たす場所に固有な関係の

役割もまた、多くの地理学者から大きな関心が向けられてきた(Cox 1989; Cox and Mair 1988; Harvey 1987; Hudson and Sadler 1986; Walker 1985)。さらに、日常的な場所に根ざした社会実践が、集合行動の依拠する意識とアイデンティティをどのように形成するかに着目する人々もいた(Gaston and Kennedy 1987; Savage 1987; Thrift 1983; Thrift and Williams 1987)。これらの人々はみな、地方の過程とグローバルの過程

との関係、構造と主体の循環的關係、集合行動において場所とコミュニティの果たす重大な役割などに、とくに注目している。Harvey(1987, 281)が論じているように、「抵抗と変化のグローバルな戦略は、実際の場所とコミュニティをふまえて出発しなければならない」のである。

それにもかかわらず、集合行動の発生と成長に与える場所とコミュニティの影響は、ほとんど理論化が進んでいない。既往の地理学の研究は、おもに経済的再編成に抵抗し適応する運動において、階級や領域の結びつきに注目している。たんに、集合行動が生じるだろうと仮定されている。集合行動にきわめて地理的ないし時間的な多様性が存在するため、こうした過程は容認できない。

集合行動の持つやっかいな特質は、地理学以外の他分野で明確に認識されている。過去十年間に人類学、政治学、歴史学では、様々な形態の集合行動を説明しようとする多くの研究が行われてきた。例えばそれは、投票行動、異議申し立て行動、国家形成、組織成長、利他主義などである。これらの研究は、1980年代に経済学から取り入れた合理的選択理論にかなり依拠している¹⁾。

合理的選択理論の主張は、地理学者になじみの深いものである。空間学派の伝統に従う研究者たち、とくに経済地理学者たちは、方法論的個人主義という合理的選択理論の認識論や「経済人」という人間性に関するモデルをこれまでずっと受け入れてきた。地理学における空間学派の伝統と同じように、合理的選択理論は戦略的に合理的な行為者を仮定している。これを基盤として、合理的選択理論は、「合理性の概念が特権的ではあるが必ずしも唯一の役割を果たしていないような、人間行動の一般的な説明」(Elster 1986, 21)を行なおうとする。

けれども地理学者は、集合行動に対して合理的選択の説明を用いるのに遅れている。これはおそらく、合理的選択理論の何らかの形態と過去十年の地理学における議論の成果とが根本的に両立し得ないことに原因があると思われる。すなわち、(1)人間行為の一般的な説明が構築可能であり、(2)その根幹は戦略的合理性の存在にあり、(3)それは個人の行為者の戦略的な合理性に関するものである、という考え方は、構造と主体、实在論、ポストモダニズムといった議論の中心的な見解の多くと矛盾するのである。これらの議論を

通じて、地理学者は「グランドセオリー」や「統合」理論、人間行動に関する単一の動機づけ、人間主体に関する個人主義的な考え方に慎重な姿勢をとるようになった。

その結果多くの地理学者は、合理的選択理論が依拠している方法論的個人主義(Sayer 1984)や人間性に関する経済人という説明(Barnes 1988; 1989; Barnes and Sheppard 1992)に対して、懐疑的な姿勢をとるようになった。経済人の仮定は、人間行為が形成される際の場所、空間、つきあいの重要性を無視しているために、とりわけ強い批判を浴びてきた。さらに加えて経済人モデルは、戦略的合理性にだけ注目しているという点で、本質論者である。戦略的合理性だけを容認することによって、経済人モデルは、人間を本質的に、操作可能なものと描いている。集合行動でさえ、個人の利益を増大させるものと考えられている。

合理的選択理論は、集合行動を問題構制として真剣かつ厳密に取り扱う数少ないアプローチの一つであるというも事実である。とくにそれは、フリーライダーの問題に向けられている。つまり、大規模な集合行動に及ぼす各人の影響は僅かであり、集合行動の便益が公共的で無償である時に、合理的で利己的な個人がなぜ集合行動に参加するのかという問題である。地理学者はこの疑問に十分に取り組んでいたわけではない。

この論文では、集合的政治行動への個人の参加に注目する。以下で明らかにされるように、合理的選択による説明は満足のものではない。それにもかかわらず、合理的選択理論はおそらく集合行動の問題を考察するための最良の出発点である。フリーライダー問題に対する合理的選択の説明の欠陥を見つけ出すことによって、集合行動に果たす場所とコミュニティの大きな役割が明らかになる。Harveyが行なっているように、集合行動の多岐にわたる理論化のためには、場所とコミュニティの現実から出発しなければならない²⁾。純粋に戦略的合理性を仮定したモデルの欠陥を修正するためにも、合理性の広いとらえ方—理解が実現し、共同体の紐帯が形成され、集合的アイデンティティが構築される過程を認識した考え方が必要とされているのである。Habermasのコミュニケーション的行為の理論は、合理性の考え方が異なっており、その概念とともに、ここで提示される集合行動の再定式化において中心的な役割を果たす。もちろん集合行動の変動は幅広いシステムの考察なしでは理解できない。した

がって、この論文の最後の部分では、アイデンティティ形成の政治経済と、コミュニケーション的形態の合理性から戦略的形態の合理性への変化に抵抗する政治運動における場所の役割に焦点を当てる。

合理的選択理論とフリーライダー問題

合理的選択理論の中にもかなりの差違がみられる³⁾。大きな差違は、「強い」合理的選択のアプローチと「弱い」合理的選択のアプローチの間にみられる。強いアプローチは社会的・制度的制約を合理的行動の所産であると見なし、それらは合理的選択による分析の対象になりうると考える。すべての社会的・制度的制約がその分析枠組みのなかに含まれうると仮定されているけれども、そうした制約を説明している人は誰もいない。弱いアプローチでは、社会的・制度的制約が所与の枠組みと見なされ、その枠組みの中で合理的行為者が便益を最大化したり費用を最小化すると考えられている。制約は明確に認識されているが、普遍的な戦略的合理性という観点から、必ずしも分析可能とは考えられていない。

Olson(1965)の「集合行為論」は、おそらく、集合行動に関するもっとも優れた強いアプローチの分析である。小さな集団規模の影響を考察している点を除けば、Olsonは集合行動(とこれを促進する制度に対する)あらゆる社会的・制度的制約を無視している。Olsonは、いかなる社会・コミュニティの紐帯も欠いた利己的な個人だけしか考察していない。孤立した利己的な経済人という仮定に基づいて、Olsonは、そのような個人が集合的行為をとるためにはどんな条件が必要かを問うている。Olsonの主張によれば、個人は大規模な集合行動において僅かな影響しか持たず、そのような行動から得られる便益は公共的であって、非参加者にも与えざるを得ないので、合理的個人は集合行動に参加しない。戦略的に合理的な個人は、フリーライダーとなるだろう。「共通の利益のために個人を行動させるには強制とか他の特別な工夫がなければ、合理的で利己的な個人は共通の利益や集団の利益を求める行動を起こさない」(Olson 1965, 2)。

Olsonの研究は厳しく批判されてきた。厳密な戦略的合理性の視点から、「合理的行為に関するこの定義の難点は、これに基づく理論に従えば、誰も投票せず、ストライキも、反抗も、革命も決して起こらないと予測される点にある」とDeNardo(1985, 54)は述べてい

る。集合行動への参加に対する個人の期待効用は実質的にゼロなので(なぜならその人がフリーライダーになれば集合行動の全便益を得ることができるので)、街頭活動に一日を過ごしたり投票に行ったりする費用と便益だけが重要となり、それらはおそらくネットでの負の効用を持つだろう⁴⁾。

合理的選択理論をめぐる昨今の大きな論争を引き起こしているのは、合理的選択理論の理論的含意と大きく異なった経験的観察との間に見られるこうした乖離に他ならない。

フリーライダー問題に対する「強い」内的説明(思考と選好に変化がないとする)が提案されている。DeNardo(1985)は二つの可能性を明らかにしている。(1)個人は集合行動への参加の重要性を過大に評価するので、その人の行動の期待効用はゼロではなく正となる。(2)人々に出会うことに満足と好運を感じるために、集合行動の成果がどうであれ参加の効用は正となる。けれども前者の説明を支持する根拠はほとんどないし、Barry(1970)とDeNardo(1985)が述べているように、後者の説明は参加を動機づける際の政治問題の重要性を無視している。DeNardo(1985, 56)はこう説明している。

もし真剣に取り上げるなら、この合理的選択理論の修正が意味することは、もしデモの主催者が行進する人にコーヒートーナッツを配るだけだとしても、社会主義者は喜んでファシズムのデモに参加するだろうし、反対にファシストも社会主義者のデモに参加するだろうということである。結局のところ、デモへの参加者が一人増えてもデモの成果に影響を与えないことがはっきりしている場合に、人々がその誘因だけを峻別して享受しないのはなぜなのだろうか。

「強い」アプローチの三つめの説明は、Taylor(1987)とElster(1989)によって提案されているものであり、彼らの主張では、囚人のジレンマのゲームのなかに時間を組み入れることによって、「相互規制的な協力」が生じると見なせる。行為者は、「もしあなたがそうした時にだけ協力する」という約束で、「利己的で合理的な」協力的行動に加わる。けれどもHector(1990, 241)はつぎのように主張している。すなわちゲームを何度も繰り返しても「そうした集合行動の問題に対する解決法にはほとんど役立たない」。なぜなら、均衡解は複数存在し、行為者は完全情報をもつと仮定して

いるからである。

その他の様々な「弱い」外的説明は、これより説得力がある。中央機関(例えば国家とか労働組合)は、集合行動に参加した人々に報酬を与えたり、参加しなかった人々を罰するというように、選択的誘因を与えるかもしれない(Olson 1965; Elster 1989)。しかしこの説明は、中央機関の形成を前提条件としているという点で、非合理的な選択メカニズムと考えられる。

もう一つの外的説明は、中央機関ではなく地方分散したコミュニティに依拠する。Michael Taylor(1982; 1987; 1988)の主張によれば、協力行動は条件付きであり、合理的な自己利益から生じる。人々の関係がコミュニティによって特色づけられている時に、協力行動がいちばん成功しやすいのである。Taylorの図式では、協力行動はコミュニティによる正と負の承認—後者はゴシップや冷やかし、侮辱を含む—に対する利己的な反応である(M. Taylor 1990)。

その他の説明は、自己利益的には基づいていない。そのうちのいくつかは、合理的選択の理論家もその存在を知っている。例えば Przeworski(1985)と Elster(1989)は、利他主義を認識している。具体的に言えば Elster(1989, 17)は、「非合理的[規範的]な動機は…協力行動のための意思決定にかなり介入している」ことを認めている。Sen(1978)と Jencks(1979)のような合理的選択理論を批判する人たちは、同情や関与、共感そして道徳の重要性を議論している。けれども合理的選択の理論家たちは、モデル化があまりにも複雑になるので、結局は非利己的な形態の行動を軽視している。Przeworski(1985, 386)が述べているように、「どんな時にも利己的個人と利他的個人、イデオロギ一的個人が共に存在しているように社会をリアルに描くならば、どんな推論的分析もほとんど不可能だろう」。われわれはそうした「複雑さ」を捨て、利己的で戦略的に合理的個人を仮定することで、集合行動の説明を作ることを彼は提案している。しかし Przeworskiの立場は説得力がない。「社会のリアルな描写」が本来的に持つ「複雑さ」は、集合行動の多くの事例を理解するために実際にはきわめて重要なのである。実を言えば、合理的選択の理論家たちが提案しているフリーライダー問題に対する説明のうちのいくつかは、非戦略的形態の合理性や個人のアイデンティティ形成ならびに集合的アイデンティティ形成が重要だと示唆している。

コミュニケーション的合理性

Przeworski(1985)は利他主義と選好変化に関する短い議論の中で、Offe and Wiesenenthal(1980)による対話を通じた選好変化の考え方を「非常に興味深い」と考えている。他の理論家たち(M. Taylor 1990; Moore 1966)は、選好や態度、信念を変えることによって集合行動の問題を解決する場合に政治的企業家が果たすことのできる役割を強調している。こうした変化は戦略的操作を含む場合もあるが、戦略的な裏の動機がなくても、新しい理解へと広汎に到達することを示しているのかもしれない。

多くの合理的選択理論の支持者は、非戦略的な言説や非利己的な行為という概念を認識して議論しているが、こうした概念を理論へと系統立てて組織的に統合した人は誰もいない。たとえ関心は向けられるとしても、「非合理的」行為の二次的な領域としてしか見なされていない(Elster 1989)。DeweyとArendtの研究に暗黙となっているコミュニケーション理論の概念に依拠しながら、Habermasは、異なった形の合理性の概念を提示しており、その概念は社会的相互作用の戦略的形態と非操作的形態の両方が認められている。

『コミュニケーション的行為の理論』(1984)において Habermasは、二つの別々ではあるが相互に依存した社会の領域—システムと生活世界—を明らかにしている。「システム」は物的な生産と再生産の領域であり、成功を目指した行動—戦略的行動と手段的行動の両方を含む—を伴う(第1図)。行動が合理的選択の規則に従い、合理的な敵対者の意思決定に影響を与えようとしている場合に、その行動は戦略的と見なされる。行動が手続き的規則に従い、物的な環境と出来事に介入する場合には、その行動は手段的となる⁵⁾。

「生活世界」は、集合的に共有された基盤的信念から構成される象徴空間を形成する。そしてその信念の中において、文化的伝統、社会統合、規範構造(価値と制度)は、コミュニケーション的行為の絶えざる解釈過程を通じて再生産され変形されるのである。コミュニケーション的行為は、それが理解へ到達することを目指し、コミュニケーション的合理性に基盤を持っているという点で、通常のコミュニケーションとは区別される。コミュニケーション的行為は「二人以上の主体が、自分たちの共有する状況についての理解に達し

行動指向 行動状況	成功指向 (システム)	理解到達指向 (生活世界)
非社会的	手段的行動	
社会的	戦略的行動	コミュニケーション的 行動

第1図 行動の類型. Habermas(1984)に基づき作成

ようと努力する相互作用を強調する」(Thompson 1983, 279)。

コミュニケーション的合理性は、複数の主体間において正当性を主張する声の高まりにその基礎がある。そうした主張は、合理的動機付けを推進する力を持っている。「話者は聞き手に彼の「言説」を受け入れるように合理的に動機付けることができる。…なぜなら…彼は、聞き手による正当性の主張への批判に耐えられる説得力のある根拠を、もし必要であれば提示することを保証できるからである」(Habermas 1984, 406)。話者は暗黙のうちに自分の言説が、(1)真実であり(存在論的な前提条件が満たされている)、(2)正しく(通常の規範に合致している)、(3)正直である(話者の主観的な経験と意思がその人の話す言葉と同じである)ということを主張している。

Habermas の著作における主要なテーマは、文化的伝統と価値、集合的アイデンティティ、社会的統合を再生産したり変換する際に、コミュニケーション的行為が果たす中心的な役割である。コミュニケーション的行為はまた、生活世界の規範構造に依拠する合理的・道徳的行為者が社会全体の問題を集団的に批判することを容認する。コミュニケーション的行為とコミュニケーション的合理性に固有な論理に Habermas が注目していることは、個人主義的で利己的な意識の哲学—合理的選択理論が依拠するもの—から、合意ならびに集合的・協力的な人間行動の起源を十分に認識した哲学への移行を表わしている⁶⁾。

Habermas は、この方向に沿って彼の研究を展開してはいないが、彼の特殊な合理性に関する考え方は、本質論的ではない人間理性の考え方のための門扉を与える。彼のコミュニケーション的合理性はつねに、地理的にも歴史的にも多様な生活世界の規範構造に関係している。「一つの事例を理由とか根拠と見なすかど

うかは、…言うまでもなく、コミュニケーションへの参加者がある特定の生活世界のメンバーとして共有している背景の文化的知識に影響される」(Habermas 1982, 270)。

集合的な意思形成を明示的に検討すると、Habermas はすべての比較的安定した社会形成が、行為を調節するための戦略的操作だけでなく理解に到達するかどうかにも影響されることを認めている。

相互作用は広い幅をもって広がり、その一方の極には価値指向の行為があり、他方の極には利害指向の行為がある。前者の場合には、様々な行為計画意図の調整は価値合意に基づいて行なわれ、後者の場合には利害のバランスをとることによって行なわれる(Habermas 1989, 145)。

コミュニケーション的行為調整と戦略的行為調整というこの連続体を所与とすると、合理的選択理論が戦略的行為だけに注目してきた理由が問題となる。一つの明白な答えは、合理的選択の理論家がたんに、非戦略的で非利己的行為を違った形態の合理性を表していることは考えなかったというものである。合理的選択の理論家にとって、非戦略的で非利己的な行為は、捉えどころのない厄介な「複雑さ」に過ぎなかった。さらに重要なのは、コミュニケーション的合理性は、文脈から切り離れた分析には耐えられないことにある。本質的に利己的で社会的に孤立した個人を仮定することによって、合理的選択理論は一見したところどの時代のどんな場所にも適用できる分析のための枠組みを提供している。コミュニケーション的合理性はそうした枠組みを認めない。行為者がコミュニケーション的行為において依拠する生活世界の価値は、地理的、時代的にも多様である⁷⁾。しかもこれらの価値は、他者との相互作用に依存し、その中で形成される。そこには、社会的に孤立した個人は存在しない。各々の行為はつねにダイナミックな社会構造に基盤を持っているのである。

合理的選択理論は、他者とのコミュニケーションの相互作用の中で、人々が自分の社会状況を解釈するという事実を見落としてきた。当然ながら合理的選択理論は、限定的な経済主義的な取り扱いを集合行動に対して行なっているとして、激しく批判されてきた(Calhoun 1988; Cohen 1985; Eder 1985; Melucci 1985)。Cohen は、Olson に端を発する集合行動の伝統についてつぎのように論じ、様々な批判者の立場を代

表している。

手段的(そして戦略的)用語以外の用語による価値や規範、イデオロギー、企図、文化、アイデンティティの分析を排除することによって、集合行動の伝統的な研究は、風呂の湯と一緒に赤児を流してしまった。…個人的利害と集団的利害の解釈を形成し、集団を作ったり、社会運動を起こす行為者の能力に影響を与えるような経験の側面を分析することが必要なのである(Cohen 1985, 688)。

合理的選択理論に見られる行動調整という考え方は、根本的に欠陥がある。アイデンティティが形成され、価値が学習され、利害が解釈される社会的文脈を無視することによって、合理的選択理論は、フリーライダーの問題を克服するために必須の前提条件であると多くの人たちが主張するものを排除している。他方 Habermas の研究は、合理的選択理論の与える戦略的行為への考察も維持しながら、そうした考察をまっすぐ目指している。合理的選択理論のパラダイムの枠内で研究している人々は Habermas の研究を見越してきたけれども、集合行動を分析する多くの研究者は(弱い合理的選択のアプローチのみならず共同体論やフェミニストのアプローチに至るまで)フリーライダーのジレンマを克服するために「コミュニティ」の概念に注目してきた。少なくとも共同体論やフェミニストの理論家たちが用いている「コミュニティ」概念は、Habermas の生活世界の概念とかなり類似している。

コミュニティ、場所、集合行動

集合行動の研究において二つの対極的な「コミュニティ」概念が存在する原因は、その用語のかなり曖昧な意味と「場所」概念との混同にある。合理的選択理論の「弱い」アプローチを主張する人は、コミュニティの紐帯の存在を認めているけれども、彼らはそれを厳密に、個人が自己利益を決定するための背景と見なしている。弱い合理的選択の図式では、コミュニティは、集合行動に加わる戦略的な合理的個人から構成される。なぜなら、彼らはコミュニティから受ける制裁を避け、動機付けを受け入れようとするからである。行為者が集合行動に加わるのは、個人の自己利益にかなうからである。このアプローチでは、フリーライダーの問題は、コミュニティ、文化、社会的規範をずるいやり方で取り込むことで解決されるが、厳密に利己

的な個人は不変のままである。

一方、共同体論やフェミニストの理論家は、Habermas の「生活世界」と似たコミュニティ概念を採用している。彼らは、集合的で共同体的なアイデンティティはコミュニケーションを通して形成されると主張する。そこから得られる共通の理解は、道徳的な価値を持つ生活様式と個人を超越した集合的アイデンティティの形成に対して共通の基盤を与える。こうした道徳的紐帯と集合的アイデンティティは集合行動の基盤となり得る。フリーライダーの問題に対する両方の説明ともっともらしいが、弱い合理的選択のアプローチは、共同体的紐帯の形成に関する説明は手つかずのまま残されている。

これら二つのコミュニティの概念を詳しく検討すると、集合行動の背後に隠された二つの異なるメカニズムが明らかとなる。Michael Taylor の研究はおそらく、フリーライダーを克服するために場所に根ざしたコミュニティの概念(Calhoun 1988; Elster 1989; M.Taylor 1988; 1990)や場所に固有の社会的相互作用(Axelrod 1984; Coleman 1990)に注目している「弱い」合理的選択の理論家によるアプローチの例を明瞭に示している。

Michael Taylor(1988, 64)の主張によれば、「革命と反乱における農民の集合行動はコミュニティに根ざしており、このことが莫大な数の人々がフリーライダーの問題を克服できた主要因であり」、「昔から存在する農村コミュニティの存在のために、農民が革命的集合行動に参加することは合理的となる」(M.Taylor 1988, 77)。Taylor は、コミュニティをつぎのような人々の集団であると定義している。(1)共通の信念と価値を共有する人々、(2)相互関係が直接的で多様である人々、(3)メンバー間にみられる一般性を持ちバランスのとれた相互扶助を行なう人々。けれども Taylor の分析に注目すると、第二と第三の基準は強調されているが、第一の基準はほとんど考慮されていないことがわかる。Taylor は、コミュニティが条件付きの協力に対して必要な条件を与えるという面でコミュニティに注目している。コミュニティが重要な理由は、コミュニティの存在によって「個人の行動を容易に監視することができ」、「強いコミュニティは、社会秩序を維持する際に非常に効果を持っている一連の強力な正と負の社会的制裁を活用できる」からである(M.Taylor 1988, 67)。個人はいつも戦略的に振る舞い、個人の自己利益のためにだけ「協力する」。つまり彼らは、

Elster(1989)の表現で言う「利己的な合理的協力行動」に従事する。Axelrod(1984, 100)はつぎのように主張している。「基本的な考え方は、効果的に仕返すことができる他人がいなければ、逃亡に成功できるに違いないというものである。その場合、逃亡した人は匿名の他者の大海の中に迷い込むことはできないことが必要とされる」。この図式において、「協力」は、同一個人との度重なる相互作用を必要とし、同時にまた、こうした人々のアイデンティティと行為の記憶も必要とする(Coleman 1990)。

Taylor はまた、コミュニティの時空間の連続性が持つ重要性も強調している。社会的制裁の有効性や他人が条件付きの協力に加わっているという知識、条件付きの協力の経験は、「反乱への参加者は前から存在するコミュニティのメンバーであり、反乱の後も同じコミュニティのメンバーであり続けるだろうという事実から生じる」のである(M. Taylor 1988, 69)。行為者の生存の保障が、時間的に連続した場所に固有のコミュニティと複雑に結びついている場合には、「利己的で合理的協力」を促す制裁と監視がきわめて効果的となる。

それゆえ、フリーライダーの問題に対する Taylor の説明にとって、コミュニティは根幹をなす。しかし Taylor は、非常に特殊なコミュニティの観念を用いている。彼にとってコミュニティとは、コミュニケーション的理解に基づいた道徳的諸関係ではなく、同じ領域の中で互いに相互作用する人々の集まりである。Taylor は、コミュニティという用語を用いて、特定の場所を共通して占めることが個人の戦略的行為に影響を与えることを強調している。

Calhoun(1988)もまた、革命の動員行動におけるコミュニティの重要性を強調している。Calhoun は、いくつかの点で Taylor と対応しており、以前から存在する共同体の組織とコミュニティが与える強力な選択的動機付けを、フリーライダー問題の克服にとって重要であると考えている。すなわち彼もまた、同じコミュニティという場所の中での相互作用の重要性を強調している。しかし、人々をたんに同じ場所に集中させて、互いに制裁を加えたり相互に監視させるだけでは、集合行動を発生させるには不十分である。共通の意識が発達しなければならない。

Calhoun が考察しているように、Marx と Engels は、階級意識が労働者の共通の生産活動から生じると考え

ていた。

工場と大都市への労働者の集中と職場組織の増大そのものが、労働者を団結させ、彼らの活動の社会的基盤を与えるのに役立つ。…彼らの共通の利害に基づく日常の相互作用を通して、とりわけ彼らを搾取する人々に対抗する継続的な政治活動を通して、労働者は階級意識を発展させる (Calhoun 1988, 134-35)。

しかしながら、この過程だけでは言うまでもなく不十分である。集合意識は、たんなる物質的利益や社会的相互作用の関数ではない。共有された社会的存在は、革命的な集合行動を活発化させるのには、とても十分とはいえないと Calhoun は主張する。むしろ、共同体の紐帯が必要なのである。この紐帯は Taylor が主張する自己利益に根ざした共同体の紐帯ではなく、むしろ「道徳的責任という考え方が含意する長期的な活動の見方に対して個人が関与する」(Calhoun 1988, 147)紐帯である。しかもこうした共同体の紐帯は、何世代にも渡って伝えられるだけでなく、「実際の毎日の社会活動」(Calhoun 1988, 147)の中での合意を通じて絶えず生産され、再生産される。

Calhoun によるコミュニティの生産という考え方は、多くの共同体論の理論家たちの考え方と類似している。Williams(1989)は、コミュニティの基盤をコミュニケーションに求めている。Bowles and Gintis(1986, 160-61)の主張によれば、「紐帯は、社会行動のたんなる手段ではなくその構成要素であり」、「連帯と共通の利害は、具体的なコミュニケーション的行為や組織的行為を通してのみ存在する」。言うまでもなくコミュニケーションと共同体的紐帯の形成は近いほど強くなるが、現代社会におけるアクセシビリティの増大によって場所に固有な相互作用はさほど重要ではなくなっている。共同体論の説明においてコミュニティの核心となるのは、場所の内部あるいは場所間でのコミュニケーション的相互作用の中で形成される紐帯である⁶⁾。

Habermas(1989)と Elster(1989)は行動調整の形態の連続体が集合行動を支配することを強調している。行動調整の形態は、選択的誘因や制裁の押しつけに規定された狭小な考え方の自己利益から、道徳的関与と集合的アイデンティティに基礎を持つ非利己的動機付けにまでわたる。個々の集合行動が(もし発生するとすれば)、この連続体のどこからその動因を引き出すか

は、コミュニティと場所の特性にかなり規定される。しかし、コミュニティと場所の重要性は、その用語が明確に定義されるなら、もっと理解が進むだろう。Agnew(1989)が注目し、上の事例が示しているように、二つの用語の使い方は一貫性に乏しく、その概念はしばしば混乱している。

コミュニティの意味はとくに不明瞭である。その語の持つ二つの異なった意味とは、(1)「道徳的な価値を帯びた生活様式」、(2)「孤立した地理的環境の中の社会関係」である(Agnew 1989, 13)。Taylorと「弱い」合理的選択の理論家の多くは、二番目の意味だけを強調し、最初の意味は形式的にしか考察していない。

場所もまた、多くの定義を持っている。それはもともと一般的には、つぎのように考えられている。(1)場所の感覚、その中で暮らすことを通じて領域へと発展する情緒的な紐帯、(2)ロカール(locale)あるいは「場所の中で行われる日常のルーチン的な社会的相互作用のための環境」(Agnew and Duncan 1989, 2)。

コミュニティと場所という用語の混乱の原因ははっきりしている。つまり、両方の用語の二番目の定義は、実際の目的に対しては、同じである。けれども、もしわれわれが理解の達成と戦略的操作に基づいた、異なる二つの形態の社会的相互作用を認識し、同時にまた、社会関係は孤立した地理的環境の中で作られ、しだいに空間的広がりを持つようになるという事実を認識するなら、コミュニティと場所をもっと鋭敏に区別できるだろう。

相互理解に根ざす「道徳的価値を帯びた生活様式」の意味で理解されるコミュニティは、Habermasの生活世界の概念とかなり対応している。コミュニティは(孤立した地理的環境の中で形成されるという意味では)場所に固有だが、(広範囲の人々によって共有されているという意味では)地域的な広がりを持つ。戦略的操作と手段的行動に根ざすシステムもまた一地方自治体の行動や、地域労働力プールを再生産する制度の中に見られるように一場所に固有なこともあるが、地域的な広がりを持つことも多く、広い地域にわたって商品のフローや手段的権力の行使が見られることもある。

このように整理されるコミュニティと場所の概念は、分析上明確であり、強いコミュニティは特定の場所に基盤を持つことが多いという事実を否定するものではない。場所とコミュニティの持つ特質とそれらが互い

に絡み合った形態は、意識の形成や個人間の紐帯の形成、集合行動の潜在可能性に対して明白な含蓄を持っている。

場所、コミュニティ、集合的アイデンティティの形成

多くの地理学者と社会学者は、意識とアイデンティティが場所の中で形成されると主張してきた(Agnew 1989; Giddens 1984; Gregory 1989; Kirby 1989; Pred 1986; Rustin 1987; Thrift 1983; 1985; Thrift and Williams 1987)。Thrift and Williams(1987, 16)はつぎのように述べている。

社会関係を包含した個々の実践は、家庭、仕事、学校、店などの様々な生活過程を通して、人々が他人と混ざることとを可能とする制度によって作り出される。こうした実践は、世界の説明を与え、そうする際には特定の制度的な知識のストックに依存する。制度は、階級のような社会的分断を作り出し、またこれによって作られるので、異なる人々は制度によって異なる形で形成されることになる。「(意識が) 発達するチャンスの政治的経済」が存在するのである。

そうした実践は、言うまでもなく時間と空間の中でルーチン化している⁹⁾。広く知られている日常的時一空間パスという Hägerstrand の概念化は、場所の中での意識とアイデンティティの形成のフィジカルな構造を示していると考えられる。時一空間パスの結合は、物質的前提条件を決定する。特定の場所のドメインを共有する個人は、必然的に、こうした相互作用の意味に立ち向かわなければならない。各人の個人史の中で「言語が習得され、個性が発達し、必ずしも明確とはならなかったり自分で理解していないイデオロギーが発展し、意識が発達する」(Pred 1986, 18)。そうした時一空間のバンドルが比較的安定して継続する時には、コミュニケーションによってとり行われる理解や意味、価値は個人の奥深くにしみ込み、人々は自分たちの経験の中に共通性を見出すだろう。人々は自分たちをコミュニティのメンバーと考えるようになり、自分たちを集団と見なすようになるだろう¹⁰⁾。Rustin(1987, 34)はつぎのように述べている。「集合的アイデンティティは空間を共有することによって形成される」。

コミュニティは、集合的アイデンティティを意味しており、「必ずしも他者の自己利益とは無関係に評価

されるべき付加的な美德ではなく、多くの場合、(その)メンバーにとって継続的な利己心の条件である」(Calhoun 1988, 161)。われわれが自分以外の人々を識別するという事実は、非利己的な形態の行動に対する基盤となる。つまりわれわれは、「(他人の)利益をわれわれの主観的な厚生関数に組み込み、その結果、彼らの利益はわれわれ自身のものとなる」(Jencks 1979, 54)。

Jencks(1979, 54)は、ある社会集団のメンバーに対する利他的な行動を「共同体的利他心」と名付けている。

共同体的利他心は、特定の個人ではなく集団を識別することと関わっている。この集合性は、事実上どんな形態もとらうが、現代社会においてもっともよく見られる事例は家族や職場集団、国民国家、人種である。それぞれの場合に、われわれは、「利己的」利益を再定義して、われわれがその一部をなす大きな集団の利害を主観的に理解することを含むようにする。大きな複雑な社会では、われわれはたいてい、少なくとも部分的に、一つ以上のこうした集団を識別する。

Unger(1975)や Sandel(1982)、Balbus(1983)、Charles Taylor(1989)などの他の共同体理論家たちは、「集合的屬性を個人のアイデンティティの核心にすえ、自己はつねに『位置づけられ』て、『場所をふさがれ』ていることと、言語のような多くのものは必然的に社会的である」ことを指摘している(Mansbridge 1990, 20)。フェミニストの理論家はとくに関係性と、相互性、コミュニティの重要性を強調してきた(Alison 1978; Benhabib 1986; Boyte and Evans 1984; Gilligan 1981; Gould 1978; Young 1986)。

集合的アイデンティティは、直接的にコミュニケーションの相互作用やフリーライダーの問題の解決と結びつけられてきた(Calhoun 1988; Dawes et al. 1990; Kanter 1972; Mansbridge 1990)。参加者間のコミュニケーションに関してコントロールすることで、Dawes et al.(1990)は、1,100人以上の大学生に対して一連の囚人ジレンマの実験を行なった。グループ内の被験者は、彼らの直面するジレンマについて最高10分まで話し合うことが許可された。つぎに、話し合うことを許可された被験者の意思決定が、許可されなかった被験者の意思決定と比較された。Dawes et al.(1990, 109)はつぎのことを明らかにした。

話し合いの中で人々はすぐに「われわれが」何をすべきかについて議論を始め、グループ内の他の人の行動が話し手の利益とは関係がない状況においてさえ、彼らに協力するように(または脱走するように!)説得するのにかなりの時間と労力を費やした。

集合的アイデンティティがなくても協力行動は生じることが、「議論がまったくない時には利己的な動機付けが協力を説明し、議論があるときには、集合的アイデンティティが…協力行動の大幅な増加を説明する」。Dawesと彼の同僚による実験から、「協力の程度は根本的にはとくに一つの要因によって影響を受け、それは、個人の選び方とは独立である。その要因とは、グループのアイデンティティである」という結論が導かれる(Dawes et al. 1990, 109, 99)¹¹⁾。

それゆえ、集合的アイデンティティの形成は、多くの形態の集合行動において重要な要因である。自己が根本的には集合性に基盤を持っていると見なされるなら、集合的利益は自己利益となり、フリーライダーの問題は消滅する(Cohen 1985; Jencks 1979; Mansbridge 1990)。けれども、個人が認識するのはどんな集合性なのか、こうした集合性の利益は何なのかという疑問が残っている。

場所に根ざすコミュニティの紐帯は、非常に多くの社会運動において連帯のための基礎を提供してきた。Michael Taylor(1988)とCalhoun(1988)は、フランスとイギリスにおける18世紀と19世紀の革命運動に占めるコミュニティの紐帯の中心的役割を論じている。Kornblum(1974)は南シカゴにおいて、労働組合と民族的政治運動に占める労働者階級のコミュニティの中心的役割を強調している。Hudson and Sadler(1986)は、「空間的範囲が限定された日常生活のルーチンに根ざした」労働者階級のキャンペーンを議論している。このキャンペーンは、労働者の空間的範囲が限られたコミュニティと場所の中に工場と鉱山を誘致することを目的としていた。Epstein(1990, 47)は、「1930年代の労働運動と1960年代初期の公民権運動は、その時期における闘争過程の中で深く政治化した既存のコミュニティの中から成長したのであり、そのため、こうした運動にかなりのはずみが与えられた」と述べている。しかし、コミュニティに根ざす運動が必ずしも進歩というわけでもない。NIMBY(Not In My Backyard)とバス通学反対運動における、場所に根ざしたコミュニティの紐帯の役割は広く知られている。

コミュニティの紐帯がもっとも強くなるのは、つねにそうとは限らないがたいていは、地域の相互作用が展開する機会が存在する場合である。広い範囲の相互作用は、他人の経験や行動を覆い隠すだけでなく、他人とのコミュニケーションを妨げる。狭い範囲の相互作用は濃厚なコミュニティ関係の形成の可能性を高める。

コミュニティは、連帯と集合行動のための典型的な基盤として考えられてきたが、今世紀に入ると場所に根ざしたコミュニティは、集合行動の基盤としては相対的に衰退した(Agnew 1989; Tilly 1973; Webber 1964; Wellman 1979)。この衰退は、かなりの程度は、場所に根ざした社会関係の変化に原因がある—この社会関係は、それが埋め込まれているより大きなシステムから切り離しては理解することができない¹²⁾。言うまでもなく、場所に根ざした社会関係の特徴が変化するにつれて、日常のライフパスやコミュニケーション的相互作用のための潜在的機会、集合的アイデンティティの生成も変化し、こうした変化はさらに、行為者が集合行動を起こす性向に影響を与える。

生活世界の植民地化、資本の高可動性、集合的アイデンティティ形成の政治経済

場所に根ざしたコミュニティに起源を持った、集合行動の衰退の原因を見つけ出すこともまた、コミュニティと場所の概念が混乱しているために、やっかいで困難な仕事である。たとえば Giddens(1990, 108)は、「前近代の環境における場所の優位は、解体的な時—空間の距離化によってかなり破壊されてきた」と論じている。しかし、さらに深く読み込むと、彼の場所の概念は実際にはコミュニティのことを指していることがわかる。

やや逆説的ではあるが、何人かの地理学者は、場所が次第に重要となりつつあると主張している(Harvey 1989; 1990; Swyngedouw 1989; Leitner 1990)。けれども彼らの主張は、場所の性質が資本蓄積にとってますます重要となる原因に関するものである。彼らの分析の焦点は場所に根ざしたコミュニティではなく、システム全体の考察にある。けれども、集合行動の基盤としての場所に根ざしたコミュニティの衰退と、資本蓄積の場所としての場所の重要性の増大は、密接に絡み合っているように思われる。

二つの異なっているが、相互に関連した過程は、場所に根ざしたコミュニティの衰退、つまり生活世界の植民地化と資本の高可動性、を引き起こすとは私は考える。両者とも資本主義の拡張論理から発生しており、戦略的形態と手段的形態の行為調整の相対的重要性を高める。システムの形態の合理性の拡張とコミュニケーション的相互作用の動揺は、アイデンティティ構築の政治経済における大きな変化を引き起こす。もし、社会的相互作用が次第に通貨交換や国家的強制に基づくようになり、場所に根ざしたコミュニティが資本の高可動性の増大によって次第に不安定になり、個人が加速し続けるシステムの過程の命令に従うようになるにつれて社会的接触が弱まるなら、コミュニケーション的過程を通じた集合的アイデンティティの理解と形成を成し遂げる機会はなくなるだろう。

あらゆる形態の行動調整は、結局のところ、生活世界(コミュニティ)の規範や価値に起源を持っているはずであるが、その関係は静態的ではない。Habermasは、合理性のシステム的な形態が、従来はコミュニケーション的行動によって調整されていた領域にまで拡がることを説明するために、「生活世界の植民地化」という言葉を用いている。貨幣や権力という「媒体」を通して、戦略的合理性と手段的合理性の視野は拡大し、より多くの側面の日常生活が商品化され官僚化する。Habermasは、合理化の過程そのものを問題とは見なしていないが、このシステムの媒体—貨幣や権力—の許容水準を超えて拡大する時には、システムの運営の危機と生活世界の病理が起こりうる。コミュニケーション的合理性がシステムの合理性に取って代わられる場合には、意思決定は、「もはや主観的な意味をもった行動の妥当性という、間主観的な文脈では生じない」(Habermas 1987a, 311)。文化の領域においては、それは意味の喪失という結果をもたらし、個人のレベルでは様々な精神病理という結果をもたらす。さらに生活世界のメンバーの連帯は、疎外や逸脱、集合的アイデンティティの不安定化によって脅かされる(Habermas 1987b)。

Harveyは、フレキシブルな蓄積体制の下での、都市貧困層の生活の「貧困化とインフォーマル化」に関する彼の議論のなかで、植民地化の過程を明確に説明している。賃金労働者が貧困層の居住地帯にまで拡大すると同時に、伝統的な相互扶助システムが次第に商品化される。「ベビーシッターや洗濯、掃除、大工

修理などの雑多な仕事は、これまで親切なお世話として互いにやり取りされていたが、昨今では時には商売として売買されている」(Harvey 1987, 273)。

そうした過程は、少なくとも中流階級や上流階級の生活において明瞭である。例えば Sack(1988, 646, 660)は、量産の商品が、「『他人』とは違う『自分』、『彼ら』とは違う『われわれ』」を定義するための主要な文化メカニズムとなった状況を報告している。宣伝を通して商品に吹き込まれる意味は、社会的文脈を創造することを約束する理想化である。いくつかの点では、それらは成功を収めているが、商品が指し示す場所の意味を含んだこれらの意味は、「より包括的で、表層的、あるいは『偽物』となりつつある」。同様に Bourdieu(1977, 188)は、洗練された嗜好の標象としての「象徴的資本」は、言葉を使わずに自己のアイデンティティを定義するのに役立つと主張している。象徴的資本は「共謀的な沈黙だけ」を要求する。Debord(1983, 68)は、コミュニケーションに対する商品化の影響を声高に主張している。

豊富な商品は、社会的ニーズの有機的な発展を阻害している。その機械的な蓄積は、無限の人工性を機能させ、これに直面した生活欲求は無力となる。独立した人工物が持つ蓄積力は、どんな場所にも社会生活の虚偽化をばらまく。

社会的紐帯は、社会を統合する一方で、純粹のコミュニケーションを排除する深みのない商品化されたイメージ見せものによって置き換えられるようになる(Debord 1983)。

Habermas の生活世界の植民地化という概念は、場所における資本主義の商品化と官僚化の深化と見なされる。この概念は、その依拠するコミュニティや集合的アイデンティティ、コミュニケーション的過程が蝕まれる中心的過程の一つを明らかにするのに役立つ。しかし、Habermas の研究は非空間的なために、彼は類似した効果を生む第二の過程、すなわち資本主義の空間的なダイナミクスを無視している。

資本の空間的可動性の増加そのものは、システムの合理性の拡大を示しているわけではない。資本家の意思決定はつねに戦略的合理性と手段的合理性に基づいている。しかし生産過程と資金調達の特徴が変化したために、資本は移転するのが容易になった。こうした資本の移転は、つぎには、資本に依存した生活世界の制度を不安定化したり破壊したりする¹³⁾。

1970年代初期におけるフォード主義蓄積体制の崩壊以降、利潤率の低下に対処するために、資本は空間的回避を変えてきている(Harvey 1982; 1989; Swyngedouw 1989)。フォード主義の相対的な空間的安定性は、企業が資本蓄積に有利な場所を求めて世界中を探すようになるにつれ、急速な空間的再編成にとって代わられた。移動コストの低下やコミュニケーション技術の改良、非常に流動性の大きな金融資本の優位は、こうした立地移動を促進してきた。

しかしながら資本の高可動性は、人々の高可動性とは対応してこなかった。Cox and Mair(1988, 312)が主張するように、人々は地域に従属する傾向が強い。

行為はルーチン化する傾向があり、まさにその点で人々は地域に従属する。いったん住居を構えたと、ルーチン化した行為は、個人の目的の実現を促すだけでなく、予測可能性と信用を持った世界を作り上げる。そこには、空一時間の変化を含む変更に対する抵抗が存在する。それゆえ、当該の些細な社会関係とは無関係に、人々が地域に従属するための物的基盤が存在する。

「コミュニティ」と「場所」という言葉が頻繁に混同されていることが示すように、コミュニティは、こうした地域的なルーチン実践にその基礎を持つ。それゆえ、コミュニティが資本の高可動性によって破壊されるのは、驚くにあたらない。脱工業化、資本投資の不足、支出の減少は、日常の社会的相互作用の諸制度を破壊し、コミュニティメンバー間の争いを発生させたり激化させ、どこか別の場所に生活の糧を求めよう人々を移動させ、さもなくば集合的アイデンティティを破壊したりその形成を妨げる。経済の空間的流動性が増大すると、地方自治体は企業的な開発戦略を練り上げることを強いられ(Cox and Mair 1988; Leitner 1988)、その際には、域内の労働者階級とマイノリティコミュニティを犠牲にすることが多い。たんに安定した経済基盤を維持するという地方自治体の強調する必然性は、何にもまして体系的な配慮を重視する。

資本の高可動性と生活世界の植民地化は、コミュニケーション的合理性に根ざす行動調整が持つ生活世界の形態を動揺させたり、それに取って代わったりする。システムの形態の行動調整の拡大は、必ずしも空間的再編成を伴う必要はないが、ポストフォード主義の蓄積の下では、この二つの過程が固く結び付いている。

Castells(1985, 33)は、彼が経済的、技術的再編成過程の不吉な含意を観察した際に、この点に言及している。この過程は「場所の空間」を「フローの空間によって置き換え、このフローの空間の意味は、交換ネットワークの中でのその位置によってほぼ決定される」¹⁴⁾。その帰結は、「人間経験の破壊であり、それゆえコミュニケーションの破壊であり、それゆえ社会の破壊である」(Castells 1983, 4)。

しかし、この過程が世界中に普遍的であると描くことは、単純化し過ぎだろう。Storper and Scott(1989, 33-34)は、フレキシブルな生産コンプレックスに関する研究の中で、生産システムとコミュニティの関係に見られる地理的差異の重要性を強調している。彼らの生活では、生産システムの需要に対応して、コミュニティの空間的「ふるい分け」が生じ、それは、様々な社会規範、個人の特質、多様な職業集団と社会階層の経済的能力によって異なる。異なった場所に根ざした生産コンプレックスにおいて、異なった方法で、「コミュニティ生活は…独自の意味を持ったロジックを持ち、さらに、生産システムの発展にフィードバックしたり、それを再編成し始める」。その主張は、Piore and Sabel(1984)の主張と対応する。彼らは四種類のフレキシブルな特殊化、つまり地域的集積・企業連合・「ソーラー」企業・ワークショップ工場、を識別している。そのうち、地域的集積—互いに競争し協力する比較的小さな企業から構成される特化した工業地区—は、賃金と職場条件を安定させ、生産水準を確保するために、コミュニティの紐帯(民族的、政治的、宗教的紐帯)を実際上必要とする。もう一方の極にある「ソーラー」企業とワークショップ工場—表面的には大量生産の企業と似ている—は、コミュニティの関係に埋没することはほとんどなく、温情主義組織を持つ傾向がある。何らかの生活世界(コミュニティ)の形態を維持することは、特定のタイプの生産コンプレックスの中にある企業にとっては、手段的に合理的だろう。実際、生活世界の形態は、工業発展に影響を与える。しかし、この点を過大評価すべきではない。ある生産コンプレックスにおいてはコミュニティ関係が重要であり、そうではない生産コンプレックスもある。さらに、フレキシブルな生産の研究における「コミュニティ」の議論の多くは、個人間の共同体的紐帯とは必然的関係を持たない企業や他の組織の「文化」に言及している。フリーライダーの問題を克服するための基礎を与え、集

合的政治行動を導くのは、個人間の共同体的紐帯である。

場所に根ざした社会関係の根本的な変化は、生活世界の制度の植民地化と空間的再編成によって引き起こされ、場所に根ざしたコミュニティの生存可能性と集合的アイデンティティの形成に対して、明確な含意を持っている。Enrikin(1991, 64)はつぎのように述べている。

場所に対する[現代的]の愛着は、無意識な慣習的行動とその地域の生活様式との結びつきというよりもむしろ、意識的な意味の創造を通じて現代生活の疎外と孤独に抵抗するための戦略である。そうした戦略は、彼らの生得的な個人主義によって特色づけられてきた。

そのような個人主義は、必然的に、集合行動に影響を及ぼす。しかしその含意は、それが最初に登場した時ほど深刻ではないかもしれない。システムの形態の行動調整の拡大は、抵抗を受けており、そのシステムが拡張主義の論理に従うかぎり、そのような拡大は決して保障されたものではない。

場所と抵抗運動

場所に根ざしたコミュニティは、植民地化と資本の高可動性によって、次第に蝕まれている。Castellsの悲観的な見解—コミュニケーションの終焉と社会の終焉—は、コミュニティ感覚に根ざした社会運動の排除を意味するように思える。けれども、そうした極端なシナリオが起きる可能性は低い。モダニティは確かに、システム形態の行動調節の拡張を引き起こしたが、それはコミュニケーションの行為の拡張も引き起こした。つまり、以前には口に出すことができなかった日常生活の多くの側面—家父長的な社会関係や宗教的教義—は、昨今では議論され、疑問を投げかけられ、批判を浴びている。社会は、価値志向の行動調節形態と利害に基づく行動調整形態という軸上に固定されていない。しかも、植民地化の過程は、社会の生活世界の基盤を完全に受け継ぐことはできない。「文化的伝統、社会的統合、社会化は…コミュニケーション的行為という媒体によってのみ実現され、貨幣と権力という推進力によっては実現されない。つまり、意味を買ったり強制したりすることはできない」(Habermas 1991, 259)。

抵抗運動は、植民地化や特定の場所での社会生活の崩壊に反応して起きることが多い。例えば Harvey(1990, 18)は、つぎのように主張している。

時-空間の圧縮と同時に、技術合理性、商品化と市場価格、資本の蓄積が次第に社会生活(あるいは Habermas ら多くの著者が言う「生活世界」)へと浸透すると、(その言葉のもっとも広い意味で理解される)場所の代替的な形成に着目した抵抗の高まりを引き起こす。コミュニティの真の感覚や多くのラディカル運動と環境運動にみられる自然との本当の関係の探し求めることは、まさにこうした感覚の鋭利な刃である。

強力なコミュニティは、危険に脅かされた際に活発化し抵抗を起こすことは言うまでもない。実際、「新しい社会運動」-反核運動、平和運動、環境運動、女性運動、ゲイ・レスビアン運動、公民権運動-に関する様々な文献は、システムの手段的行動と戦略的行動によって脅かされている集団に対して新たな社会空間を確保したり創造することを目指す運動において、共有されたアイデンティティ、文化、コミュニティが重要なことを報告している。そのような運動が組織的に連携を行なう場合には、広がりを持ち、効果的となる。

マスメディアのグローバル化は、抵抗運動の発端となり得るような矛盾も含んでいる。別々の場所から社会的相互作用を切り離すことは対話を妨げる一方で、それは以前には不可能だったグローバルなレベルでの可視性を意味している。グローバルなコミュニケーションと調査によって、弱いかもしれないが、個人は遠くの他者と共感の紐帯を作り上げ、遠くの他人のために行動するようになるかもしれない(Thompson 1990)。「メディアの大衆は、可能なコミュニケーションの範囲に対する制約を階層化しており、同時にその制約を取り払う。ある側面は他の側面から切り離すことができない。-そして、両義的な潜在性が存在するのは、その中なのである」と、Habermas(1987b, 197)は述べている。

しかし、システムの拡大と再編成に対する抵抗は、人々が場所において送っている生活から分離できないのは明らかである。Lefebvre(1979, 241)は、つぎのように強調している。

社会の本質的な空間矛盾は、抽象空間と社会空間の対立である。抽象空間とは、資本家階級と国家に起源を持つ経済・社会行為の外部表出であり、社会空間とは、日常生活

を遂行する際に、あらゆる階級の複雑な相互作用によって生み出された使用価値の空間である¹⁵⁾。

けれども、場所に根ざした関係への依存は、大規模な社会変化を求める運動にとって問題となる。地域の問題に向けられた地域の社会の動員は、大変に望ましいだろうが、グローバル化の進む資本主義システムにおいては、「コミュニティ生活は全体の中の小宇宙ではなく、一つの区画でしかない」(Calhoun 1988, 331)。現代資本主義社会における問題に立ち向かうためには、地域のコミュニティの境界を越えた大規模な組織が必要となる。多くのラディカルな大衆運動は、問題に対処するのにふさわしい規模の組織を作り上げることができなかったため、効果を上げることができなかった。「人々は、自分たちが世界を支配することができないと分かった時、彼らは自分たちのコミュニティの大きさへと世界を縮小する。こうして都市社会運動は、われわれの時代の現実問題に立ち向かうのだが、その規模や方法は適切ではない」(Castells 1984, 331)。コミュニティと集合的アイデンティティは、集合行動を動員するのに有用で必要である一方、コミュニティの目的を達成するには、戦略的で効果的に機能する大規模な組織とコミュニティを結びつける必要がある。こうした戦略は、相互的理解に基づいた非排他的で広域的なコミュニティを作り上げることを意味する。

場所に根ざした、アイデンティティ指向の集合行動に関して、一つの重要な注意すべきことがある。そのような運動はこれまで進歩的で大きな効果を持つことが多かったが、運動が反動的になったり排他的になることも起こり得るのである(Harvey 1989; Young 1990)。Harvey(1989, 273)はつぎのように警告している。「場所と個人的共同体的アイデンティティの社会的意味との結合は、ローカルな政治、地方政治、あるいは国家政治を美化することもあり得る」。NIMBY運動だけでなく民族主義運動やファシズム運動も、伝統的に、場所に根ざしたコミュニティの感覚に基づいている。とくに Young(1990)は、アイデンティティに基づくコミュニティ政治に批判的であり、コミュニティの社会境界と人種差別主義と性差別主義の排他的行為の間に大きな類似性を認めている。Young は、コミュニティの政治に代わって、すべての人に対する公正と尊敬の概念に根ざした差異の政治を主張している。Harvey と Young の両者が主張するものは、「自己を

原則に従属させる道徳的利他性」と Jencks(1979, 55) が呼ぶものに相当すると思われる。集合的アイデンティティは集合行動にとって強力な基盤であるが、それは自動的に進歩的な政治へと導くわけではないことを彼らは明らかにしている。

結論

多くの社会科学において、集合行動は合理的選択の問題として捉えられてきている。経済人の仮定に依拠することによって、「強い」合理的選択理論のアプローチは、場所に固有な社会関係から影響を受けない、排他的で利己的な個人からなる厳密なモデル化を行なっている。けれども、そのようなモデルは説得力を欠いている。コミュニティや場所に固有の社会関係を組み込んだ「弱い」合理的選択のモデルが開発されてきた。にもかかわらず、これらのモデルは依然として戦略的合理性を強調し、非戦略的行動を「非合理性」という説明不可能で付随的な領域に属すると見なす。

言うまでもなく、すべての人間行動が合理的とは考えられない。けれどもわれわれは、合理性対非合理性(ないし不合理性)という二者択一の考え方にはまり込む必要はない。Habermas は、むしろ曖昧な言葉である「コミュニティ」に包まれる意味を明らかにするのに役立つような別の合理性の概念を提案している。Habermas のコミュニケーション的行為の理論は、理解を指向した行為の合理性を明らかにする。生活世界の価値の中にコミュニケーション的行為を基礎づけることは、生活世界に見られる差異に敏感な非本質主義的な合理性の考え方を指し示している。

Habermas の研究の見方に立てば、集合行動の真の理論は、人間主体の利己的な動機づけだけでなく利他的な動機付けも、戦略的合理性だけでなくコミュニケーション的合理性も、個人のアイデンティティだけでなく集合的アイデンティティも認識するだろう。同様に重要なのは、戦略的合理性行動や理解に到達する行為者の能力、集合行動の前兆となることの多い集合的アイデンティティを形成するものが何であるのかに関する行為者の考え方を作り出す際に果たす場所に固有な社会関係の中心的な役割を、Habermas の研究が認識していることだろう。

しかし、集合行動はシステムのダイナミクスから切り離して理解することができない。生活世界の植民地

化と空間的回避を求める資本の探求は、集合行動にとって不都合な結果をもたらすかもしれない。場所に根ざしたコミュニティが集合行動の基盤として歴史的に衰退しつつある一方で、場所の特性が企業の立地と投資決定において次第に重要となりつつあるのは、おそらく偶然の一致ではないだろう。けれども社会空間をめぐる集合行動や集合闘争は消滅したわけではない。とりわけ新しい社会運動は、新しい生活世界の空間を守ったり主張したりする努力によって規定される。

けれども、Corbridge によって「道徳の距離減衰関数」¹⁶⁾と名付けられたものを克服しようとするなら、われわれは、コミュニティの理解と紐帯—それは必ずしも場所に固有ではない—から、孤立した場所の持つしばしば偏狭で排他的な関与を区別する方法を見つけなければならない。Jencks が述べているように、コミュニティの紐帯と関心は、必ずしも全体的で排他的ではない。確かにわれわれの多くは、夫婦や友達から人類に至る数多くのコミュニティや集団に属しており、それらを識別している。差異を認識したり尊重すると同時に、発展させ強化する必要があるのは、遠方の他者—空間的にも比喩的にも—のこうした紐帯である。現代の時空間の圧縮は、必ずしも問題がないわけではないが、理解のための新たな機会を与える新しいコミュニケーションの手段を生み出してきた。

注

- 1)合理的選択理論への固執は、新古典派経済学の教育を受けた実証主義的研究者だけに限定される。実際、社会学や政治学におけるもっとも雄弁な合理的選択理論の支持者は、Roemer、Elster、Przeworski、Wright といったマルクス主義的研究者である。詳細な議論は、Barnes and Sheppard (1992)を参照。
- 2)この主張は、空間と時間が社会的過程の形成にとってきわめて重要であるとする、Giddens(1984)や Soja(1989)の立場を支持している。それゆえ地理学が具体的に偶発的なことからなる非理論的な領域であると見なす Sayer(1984)の考え方は棄却される。
- 3)Nicolaidis(1988)は、合理的選択理論が依拠する新古典派経済学の原則と人間性に関する経済人のモデルを要約している。
- 4)こうした問題にもかかわらず、合理的選択に関する研究の多くは Olson の枠組みを採用し、人間行動のあらゆる側面

が経済人の仮定の下で説明可能であると考えている。Popkin(1979)の『合理的農民』はScott(1976)の『農民の倫理経済学』への批判を示している。倫理的思考は合理性と両立不可能であり、容認できる唯一の分析枠組みは合理的選択の枠組みであるとPopkinは主張している。そのような立場は新古典派経済学者だけに限らない。イデオロギーとロシア革命に関する表面上はマルクス主義的なRoemer(1988)の分析は、あらゆる側面の意識を戦略的合理性の鑄型に当てはめるようにこじつけている。Roemerの主張によれば、資源の再配分に対するレーニンの関心は、倫理的・規範的な思考ではなく戦略的思考に端を発していた。

- 5)そのような行動は、人間の手段的な利用も含むだろう。
- 6)Fraser(1987)とBerger(1991)は、生活世界とシステムを表面的には弁別的な区別をしているとHabermasを批判している。(生活世界の中の)理解を目指す行為に基づく象徴的再生産と、(システムの中の)成功を目指す行為に基づく物質的再生産とを区別することは、象徴レベルでは説得力があるようにも思えるが、それらを別々の具体的行動領域とみなす考え方は支持できない。Fraserはこの点を、とくに女性の無償労働に関して明確に指摘している。Bergerは、ほとんどあらゆる社会制度に関して、同様の批判を行なっている。Habermas(1991)は、最近の研究の中で彼の見解を明らかにしており、コミュニケーション的行為と戦略的行為はともに、生活世界とシステムの両者の中に複雑な形でからみ合っていると主張している。
- 7)生活世界の多様性を認識することは、地理的、時代的な差違の認識を意味する。奇妙なことにHabermasは、社会的過程の地理的、時間的な構造の持つ意味を長い間考えてこなかった。彼は現実からかけ離れた「抽象的」システムと「抽象的」生活世界に焦点を当て、合理性を考えてきた。けれどもコミュニケーション的倫理に関する彼の最近の研究は、様々な生活世界とその地域的なりたちにも大きな関心を示している。
- 8)コミュニティは、部分的には言語学的な意味におけるコミュニケーション的行為には還元できない情緒的・審美的紐帯に根ざしている。けれども両者は、全く無関係ではない。「もし審美的な経験が個人の生活史の文脈に組み込まれるのなら、そしてもしある状況をきわだたせ、個人の生活史の問題に光を投げかけるのに役立つのなら—もしそれが、その衝動を集合的形態の生活に伝えるのなら…審美的経験はわれわれの知覚的解釈と規範的期待の中にまで到達し、こうした影響が互いに関係している全体を変えてしまう」(Habermas 1985,202)。
- 9)私は、マスコミの重要性を否定しない。マスコミは、発信者から各地の視聴者へのおもに一方通行で非対話的な情報流である。メディアは世界中に届き、均質化する傾向があるため、もはや、意識が場所の中で形成されるのが普遍的だとは言えない。多かれ少なかれ、われわれは自分の場所に関係なしに、共通の大衆文化や政治、世界の出来事の

報道に触れている。それにも関わらず依然として場所は毎日の生活や理解を構成する際に重大な役割を果たしている。情報が受け取られ、真の会話の機会が生じ、解釈が形成されるのは、孤立した地理的環境においてである。さらに詳しい議論は、Calhoun(1986)、Kirby(1989)、Meyrowitz(1989; 1990)、Sack(1988; 1990)、Thompson(1990)を参照。

- 10)コミュニティや共通のアイデンティティの形成を、たんにフィジカルな同時存在と「取る」べきではない。共通のアイデンティティの形成は、結局解釈的でコミュニケーション的な過程である。さらに、パスの結合を主意主義的に見るべきではない。日常生活のパスは、支配の社会関係、例えば個人の労働体系的操作で満たされている。けれども、人々が何らかの理由で一緒になった場合、彼らは自分たちの経験の共通性を発見するだろう。そしてつぎに、この認識は共通のアイデンティティとコミュニティ感賞のための基盤を与えるだろう。
- 11)「社会性を生み出すもの—多くの場合、社会的になるためのいくつかの個人的動機の形態—に関する考察に関心を示してきた理論家」に関しては、Dawes et al.(1990,109)は、「人間は決して社会的ではないということを示す知見は全く存在しないと指摘している」。
- 12)私は、集合行動におけるあらゆる変化がシステムの変動過程に起因すると主張するわけではない。政治的機会の構造と、資源を動員するための組織の能力における変化もまた重要である。しかし、場所に根ざしたコミュニティに起源を持つ集合行動が全体としては過去一世紀にわたって衰退してきたという事実認識は、マクロレベルでのシステムの変化をはっきりと示している。
- 13)生活世界の制度は、象徴的再生産のコミュニケーション的領域ではあるが、その物的再生産に関してはシステムのな制度に依存している。
- 14)Castellsの「場所」は、ここで使われる「場所に根ざしたコミュニティ」という言葉と同義と考えられる。
- 15)Lefebvreに依拠しながら、Gottdiener(1985, 127)はつぎのように述べている。「現代社会において、抽象的空間—同質的で断片化された階層的空間—は社会的空間—社会的つきあいの統合空間—を支配するようになった。」
- 16)1991年4月、フロリダ州マイアミで開催されたアメリカ地理学会の年次大会における「合理性の地理学」のセッションでのコメント。

文献

- Agnew, J. (1989): The devaluation of place in social science. Agnew, J. and Duncan, J. eds. *The Power of Place*. Unwin Hyman, Boston, 9-29.

- Agnew, J. and Duncan, J. eds. (1989): *The Power of Place*. Unwin Hyman, Boston.
- Alison, D. (1978): Weaving the web of community. *Quest: A Feminist Quarterly*, 4, 75-92.
- Axelrod, R. (1984): *The Evolution of Cooperation*. Basic Books, New York.
- Balbus, I. (1983): *Marxism and Domination*. Princeton University Press, Princeton.
- Barnes, T. (1988): Rationality and relativism in economic geography. *Progress in Human Geography*, 4, 473-96.
- Barnes, T. (1989): Place, space, and theories of economic value: Contextualism and essentialism in economic geography. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 14, 299-314.
- Barnes, T. and Sheppard, E. (1992): Is there a place for the rational actor? A geographical critique of the rational choice paradigm. *Economic Geography*, this issue.
- Barry, B. (1970): *Sociologists, Economists, Democracy*. Collier-Macmillan, London.
- Benhabib, S. (1986): The generalized and concrete other: Toward a feminist critique of substitutionalist universalism. *Praxis International*, 5, 402-24.
- Berger, J. (1991): The linguistification of the sacred and the delinguistification of the economy. Honneth, A. and Joas, H. eds. *Communicative Action*. MIT Press, Cambridge, MA. 165-180.
- Bourdieu, P. (1977): *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Bowles, S. and Gintis, H. (1986): *Democracy and Capitalism: Property, community and the contradictions of modern social thought*. Basic Books, New York.
- Boyte, H. and Evans, S. (1984): Strategies in search of America: cultural radicalism, populism, and democratic culture. *Socialist Review*, 73-100.
- Calhoun, C. (1986): Computer technology, large-scale social integration and the local community. *Urban Affairs Quarterly*, 22, 329-49.
- Calhoun, C. (1988): The radicalism of tradition and the question of class struggle. Taylor, M. ed. *Rationality and Revolution*. Cambridge University Press, Cambridge and New York, 129-175.
- Castells, M. (1983): Crisis, planning, and the quality of life: Managing the new historical relationships between space and society. *Society and Space*, 1, 3-21.
- Castells, M. (1984): *The City and the Grassroots*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles.
- Castells, M. (1985): High technology, economic restructuring and the urban-regional process in the United States. Castells, M. ed. *High Technology, Space and Society*. Sage, Beverly Hills, 11-40.
- Cohen, J. (1985): Strategy or Identity: New theoretical paradigms and contemporary social movements. *Social Research*, 52, 663-716.
- Coleman, J. (1990): Norm-generating structures. Cook, K. and Levi, M. eds. *The Limits to Rationality*. University of Chicago Press, Chicago, 250-73.
- Cox, K. (1989): The politics of turf and the question of class. Wolch, J. and Dear, M. eds. *The Power of Geography: How geography shapes social life*. Unwin Hyman, Winchester, MA, 61-90.
- Cox, K. and Mair, A. (1988): Locality and community in the politics of local economic development. *Annals of the Association of American Geographers*, 78, 307-25.
- Dawes, R., van de Kragt, A. and Orbell, J. (1990): Cooperation for the benefit of us, not me. Mansbridge, J. ed. *Beyond Self-interest*. University of Chicago Press, Chicago, 97-110.
- Debord, G. (1983): *Society of the Spectacle*. Black and Red. Detroit.
- DeNardo, J. (1985): *Power in Numbers*, Princeton University Press, Princeton, NJ.
- Eder, K. (1985): The "new social movements": Moral crusades, political pressure groups, or social movements? *Social Research*, 52, 869-900.
- Elster, J. (1985): *Making Sense of Marx*. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Elster, J. (1986): *An Introduction to Karl Marx*. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Elster, J. (1989): *The Cement of Society*. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Entrikin, J. N. (1991): *The Betweenness of Place*. Johns Hopkins University Press, Baltimore.
- Epstein, B. (1990): Rethinking social movement theory. *Socialist Review*, 20, 35-65.
- Fraser, N. (1987): What's critical about critical theory? Benhabib, S. and Cornell, D. eds. *Feminism as Critique*. University of Minnesota Press, Minneapolis, 31-56.
- Gaston, M. and Kennedy, M. (1987): Capital investment or community development? The struggle for land control by Boston's black and Latino community. *Antipode*, 19, 178-209.
- Giddens, A. (1984): *The Constitution of Society*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles.
- Giddens, A. (1990): *The Consequences of Modernity*. Stanford University Press, Stanford, CA.
- Gilligan, C. (1981): *In a Different Voice*. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Gottdiener, M. (1985): *The Social Production of Urban Space*. University of Texas Press, Austin, TX.
- Gould, C. (1978): *Marx's Social Ontology*. MIT Press, Cam-

- bridge, MA.
- Gregory, D. (1989): The crisis of modernity? Human geography and critical theory. Peet, R. and Thrift, N. eds. *New Models in Geography: Vol. II*. Unwin Hyman, Boston, 348-85.
- Habermas, J. (1982): A reply to my critics. Thompson, J. and Held, D. eds. *Habermas: Critical debates*. MIT Press, Cambridge, MA, 219-283.
- Habermas, J. (1984): *The Theory of Communicative Action: Vol. I*. Beacon Press, Boston. 河上倫逸他訳『コミュニケーション的行為の理論』(上・中・下), 未来社, 1985-1987年 *Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp 1981.
- Habermas, J. (1985): Questions and counterquestions. Bernstein, R. ed. *Habermas and Modernity*. MIT Press, Cambridge, MA, 192-216.
- Habermas, J. (1987a): *The Theory of Communicative Action: Vol. II*. Beacon Press, Boston. 河上倫逸他訳『コミュニケーション的行為の理論』(上・中・下), 未来社, 1985-1987年 *Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp 1981.
- Habermas, J. (1987b): The tasks of a critical theory of society. Meja, V., Misgeld, D. and Stehr, N. eds. *Modern German Sociology*. Columbia University Press, New York, 187-212.
- Habermas, J. (1989): Towards a communication-concept of rational collective will formation. *Ratio Juris*, 2, 140-152.
- Habermas, J. (1991): A reply. Honneth, A. and Joas, H. eds. *Communicative Action*. MIT Press, Cambridge, MA, 214-64.
- Harvey, D. (1982): *The Limits to Capital*. University of Chicago Press, Chicago. 松石勝彦・水岡不二雄ほか訳『空間編成の経済理論—資本の限界』(上・下), 大明堂, 1989-90年
- Harvey, D. (1987): Flexible accumulation through urbanisation: Reflections on 'post-modernism' in the American city. *Antipode*, 19, 260-86.
- Harvey, D. (1989): *The Condition of Postmodernity*. Basil Blackwell, Cambridge, MA.
- Harvey, D. (1990): From space to place and back again: Reflections on the condition of postmodernity. Presented at the symposium on Futures, Tate Gallery.
- Hector, M. (1990): Comment: On the inadequacy of game theory for solution of real-world collective action problems. Cook, K. and Levi, M. eds. *The Limits to Rationality*. University of Chicago Press, Chicago, 240-49.
- Hudson, R. and Sadler, D. (1986): Contesting works closures in western Europe's old industrial regions: Defending place or betraying class? Scott, A. and Storper, M. eds. *Production, Work, Territory*. Allen and Unwin, London, 172-94.
- Jencks, C. (1979): The social basis of unselfishness. Gans, H., Glazer, N., Gusfield, J. and Jenks, C. eds. *On the Making of Americans*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 63-86.
- Kanter, R. (1972): *Commitment and Community: Communes and utopias in sociological perspective*. Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Kirby, A. (1989): A sense of place. *Critical Studies in Mass Communications*, 3, 322-26.
- Kornblum, W. (1974): *Blue Collar Community*. University of Chicago Press, Chicago.
- Lefebvre, H. (1979): *Space: Social product and use value*. Freiberg, J. ed. *Critical Sociology*. Irvington, New York, 285-95.
- Leitner, H. (1990): Cities in pursuit of economic growth: The local state as entrepreneur. *Political Geography Quarterly*, 9, 146-170.
- Mansbridge, J. (1990): On the relation of altruism and self-interest. Mansbridge, J. ed. *Beyond Self-interest*. University of Chicago Press, Chicago, 133-146.
- Melucci, A. (1985): The symbolic challenge of contemporary movements. *Social Research*, 52, 789-816.
- Meyrowitz, J. (1989): The generalized elsewhere. *Critical Studies in Mass Communications*, 3, 326-34.
- Meyrowitz, J. (1990): On "the consumer's world: Place as context" by Robert Sack. *Annals of the Association of American Geographers*, 80, 129-32.
- Moore, B., Jr. (1966): *Social Origins of Dictatorship and Democracy*. Beacon Press, Boston.
- Nicolaidis, P. (1988): Limits to the expansion of neoclassical economics. *Cambridge Journal of Economics*, 12, 313-28.
- Offe, C. and Wiesenthal, H. (1980): Two logics of collective action: Theoretical notes on social class and organizational forms. Zeitlin, M. ed. *Political Power and Social Theory*. JAI Press, Greenwich, CT, 67-115.
- Olson, M. (1965): *The Logic of Collective Action*. Harvard University Press, Cambridge, MA. 依田博・森脇俊雅訳『集合行為論—公共財と集団理論—』ミネルヴァ書房, 1983年
- Piore, M. and Sabel, C. (1984): *The Second Industrial Divide*. Basic Books, New York.
- Popkin, S. (1979): *The Rational Peasant*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles.
- Pred, A. (1986): *Place, Practice, and Structure*. Barnes and Noble, Totowa, NJ.
- Przeworski, A. (1985): Marxism and rational choice. *Politics and Society*, 4, 379-409.
- Roemer, J. (1988): Rationalizing revolutionary ideology: A tale of Lenin and the Tsar. Taylor, M. ed. *Rationality and*

- Revolution*. Cambridge University Press, Cambridge and New York, 229-44.
- Rustin, M. (1987): Place and time in socialist theory. *Radical Philosophy*, 47, 30-36
- Sack, R. (1988): The consumer's world: Place as context. *Annals of the Association of American Geographers*, 78, 642-64.
- Sack, R. (1990): Reply: Strangers and places without context. *Annals of the Association of American Geographers*, 80, 133-35.
- Sandel, M. (1982): *Liberalism and the Limits of Justice*. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Savage, M. (1987): *The Dynamics of Working Class Politics: The labor movement in Preston 1880-1940*. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Sayer, A. (1984): *Method in Social Science*. Hutchinson, London.
- Scott, J. (1976): *The Moral Economy of the Peasant*. Yale University Press, New Haven, CT.
- Sen, A. (1978): Rational fools: A critique of the behavioral foundations of economic theory. Harris, H. ed. *Scientific Models and Men*. Oxford University Press, London, 317-44.
- Sheppard, E. and Barnes, T. (1991): The rational actor in space and place: A reevaluation of the rational choice paradigm. Working papers of the history and society program, University of Minnesota.
- Soja, E. (1989): *Postmodern Geographies*. Verso, New York.
- Storper, M. and Scott, A. (1989): The geographical foundations and social regulation of flexible production complexes. Dear, M. and Wolch, J. eds. *The Power of Geography*. Unwin Hyman, Boston, 19-40.
- Swyngedouw, E. (1989): The heart of the place: The resurrection of locality in an age of hyperspace. *Geografiska Annaler*, 71B, 31-42.
- Taylor, C. (1989): *Sources of the Self*. Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Taylor, M. (1982): *Community, Anarchy, Liberty*. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Taylor, M. (1987): *The Possibility of Cooperation*. Cambridge University Press, Cambridge and New York.
- Taylor, M. (1988): Rationality and revolutionary collective action. Taylor, M. ed. *Rationality and Revolution*. Cambridge University Press, Cambridge and New York, 63-97.
- Taylor, M. (1989): Structure, culture and action in the explanation of social change. *Politics and Society*, 17, 115-62.
- Taylor, M. (1990): Cooperation and rationality: Notes on the collective action problem and its solution. Cook, K. and Levi, M. eds. *The limits to Rationality*. University of Chicago Press, Chicago, 222-39
- Thompson, J. (1983): Rationality and social rationalization: An assessment of Habermas's theory of communicative action. *Sociology*, 17, 278-94.
- Thompson, J. (1990): *Ideology and Modern Culture*. Stanford University Press, Stanford, CA.
- Thrift, N. (1983): On determination of social action in space and time. *Society and Space*, 1, 23-57.
- Thrift, N. (1985): Flies and germs: A geography of knowledge. Gregory, D. and Urry, J. *Social Relations and Spatial Structures*. Macmillan, London, 366-403.
- Thrift, N. and Williams, P. (1987): The geography of class formation. Thrift, N. and Williams, P. eds. *Class and Space: The making of urban society*. Routledge and Kegan Paul, London and New York, 1-22.
- Tilly, C. (1973): Do communities act? *Sociological Inquiry*, 43, 209-40.
- Unger, R. (1975): *Knowledge and Politics*. The Free Press, New York.
- Walker, R. (1985): Class, division of labour and employment in space. Gregory, D. and Urry, J. *Social Relations and Spatial Structures*. Macmillan, London, 164-89.
- Webber, M. (1964): *Explorations into Urban Structure*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Wellman, B. (1979): The community question. *American Journal of Sociology*, 84, 1201-31.
- Williams, R. (1989): *Resources of Hope*. Verso, New York.
- Young, I. (1986): Impartiality and the civic public: Some implications of feminist critiques of modern political theory. *Paraxis International*, 5, 381-401.
- Young, I. (1990): The ideal of community and the politics of difference. Nicholson, L. ed. *Feminism / postmodernism*. Routledge, New York, 300-23.